

翻 訳

邵燕君著

学院派の態度と方法

——文学機制の再構築をめぐる——

桑 島 由美子 (訳)

[解題]

邵燕君教授¹⁾(北京大学中文系)は、近年のネット文学における經典化や精英(エリート)文化の再構築、文学機制等をテーマとした学術研究を進めている。經典は、文学機構の学術權威、及び批評家はその学術的価値を決定し、市場機制を擁する読者大衆が、伝播価値を決定することにより、時代価値の重要な触媒となる。現代文化を専門とする批評家、学院派によって、メディア転換に伴う中国のみに顕著な文化現象をどう解釈するか模索が続いているが、文学機制の転換に直面する学院派の態度と方法について、学術界の実践に即して、将来の方向性を呈示する。

私の認識では、目前の発展の趨勢に照らして見れば、十年後、中国当代文学の主流は、ネット文学である可能性が高い。それは決してメディア崇拜故では無く、その中に生命力に満ちた文学機制と新しい文学様式とを認めるからである。また私はネット時代にはエリート文学は必然的に除去され、消滅するとは考えておらず、全く逆に資本が横行し、大衆が狂奔する時代にこそ、エリートの標準を建立する事が必要でありそれがアカデミズムの任務だと考えている。あるいはネット時代であるからこそ、当代文学研究者は、新しい要求を提起すべきである。私個人の文学理念では、好ましい文学生態は、ピラミッドの頂点と底辺とが相互にアイデンティティを確認する事である。もし大衆文学を主体とするネット文学が、すでに“純文学”や“主流文学”の指導的地位を放棄したなら、エリートの先端がそこから出現する事は有り得ない。それだからこそ学術界がファン達の“弁別力”や“識別”²⁾に介入して影響を及ぼし、自ら優秀と思う作品や優秀な因素を指摘して、アクセス数や定期制、ランキングの他に、エリート主導の評価基準の体系を構築する必要がある。もしこの様な体系の標準が真正に影響力を持つ事が出来れば、「新文学」を創建した五四の先賢とは異なる、私

達が身を置くピラミッドの先端の未解決の問題を、構築する事が出来る。そのため自分が率先して、その地盤に入り、その手立てと方法を探究したい。

中国ネット文学の強勢と発展は、既に主流文壇による統一の構造を打破しただけでなく、学术界はそれを正視せざるを得ない必要に迫られている。極めて大胆ではあるが、目下の形勢が発展を続けるなら、十年後には、中国当代文学の主流はネット文学になる可能性が極めて高いと予言できる。

大胆な予言をする理由は、グローバル化ネット時代の到来はもはや不可逆的であり、——文学芸術を含む、人類の文明が印刷文明以来の千年に一度の変局に置かれ、また中国ネット文学が独自の特色を持っている事による。——まさに社会主義文化体制の建立によって起こされた中国作家協会、文学期刊と専業作家の文学機制が目下のところ、世界で唯一のものである様に、中国ネット文学の全盛風景もこの地で独異的なものであり、この両者には必然的な関係があるのだ。一方では体制が原因で、中国のベストセラー機制とコミック産業は、欧米日韓の成熟、発展に遥かに及ばない。それによって大衆文化消費者の出現は一樣にネット文学に向かい、文化政策の管理も比較的寛容なため、各種の逸脱した内容もそこに生息し、とりわけ“ネット第一世代”に属する価値観が非主流の80后、90後の群体を惹きつけている。もう一方で社会構造の転型に伴い、既に20世紀50-70年代に軌道に乗り、80年代には燦然として巨大な生命力を誇示した主流文学とその生産機構は、21世紀に入ってから深刻な危機を露呈している。文学は経済社会の中で周縁化されたのではなく、活力を喪失しながら延続している体制の中で不自然に、孤立化したのである。作家と読者のいずれにも、深刻な高齢化現象が現れ、持続発展を続ける新陳代謝の能力を失っている。これと並行して、ネット文学は数十年に及ぶ発展の中で「創作—享受—評論」の一体化の生産機制を生み出し、この生産機制は、資本と新しいメディアの二重の爆発的な作用の下で、正にその基礎的構造を高速度で敷設し、数量のみならず、規模から見ても当代の「専業—余業」作家の隊伍に匹敵する百万余りの書き手の大軍を建立し³⁾、また「ファン経済」⁴⁾を援用して、読者と文学の親密な関係を再構築した。更に注目すべきは、ネット文学は完全に自ら打建てた兵營の上に発展を続け、ネットという進取のメディア形式によるばかりで無く、新文学生産機構の生成は新しい根拠地を生み、ネット作者と読者は、文学資源、美学標準、師弟の伝承等の方面で、完全に主流文壇との関係を失い、この断裂は全方位的なものであった。言うならば、主流文学はネット文学に対して制御機能を喪失したのであり、それは体制上の分断ばかりでなく、文化領導権上の喪失でもあった。これは今日私達が正視すべき問題である。

エリート基準への反思と、ネット文学への理解

ネット文学はこの様に次第に強大化したが、未だに学术界は正面切って対応するに至っていない。少なからぬ学者が、ネット文学は上辺こそ新鮮だが、その実質は旧式通俗であり、——特に「全般類型化」以降、通俗文学への属性が一枚岩となり、その中の一部の類型は、明らかに黒幕小説や、鴛鴦胡蝶派の息吹を感じさせるものである。これらの現在「新文学」のもとで抑圧されている旧式文類の興隆は、反動事物の復活と見なされ、議論の対象になっていない。

学术界の評価が依拠する標準は、疑いなく“五四”“新文学”運動が建立したエリート文学（或いは厳肅な文学）を基準としている。現代の学科体系と教育体系もこれと共生している。学术界の内部ではこの様なエリート評価体系が、自明のものとして検証を要さない。

今日ネット文学の衝撃に直面して、私達はやはりその前提に反思を求めねばならない。

正に王徳威の様な人々が晩清から五四に至る文学研究で明らかに呈示した様に、「五四」「新文学」伝統の確立には、当時デモクラシーとサイエンスの導入との直接的関係があり、その背後には啓蒙主義の発揚と、科学精神の崇拝があった。「文以載道」の士大夫の伝統と「感時憂国」の現実に駆り立てられ、「五四」の先賢達は、繁を簡に改め、選択肢を狭め試行した多種の文類を放棄して、写実主義を唯一の正統として選択した⁵⁾。後にリアリズムとマルクス主義が結合し、「新中国」体制中の唯一の権威として定められた。ここ筆者はその選択について功罪や是非を議論しようとしているのでは無く、単に「現代文学三十年」のみならず、当代文学一体化の50-70年代、更に80年代の「新时期」に於いてもリアリズムの手法は、文学の機能、そして要求されたイデオロギー機能、両面で現実的な成果を収めたと考えるのである。そしてその成功は正しく当時の社会が組織だった明確で完全な理想価値体系の中に位置していたということである。それ故、リアリズム文学の核心的機能は、「客観的に真実に世界を反映する。」ことであった。なぜ「客観的に真実に」なのか。如何にして「現象から本質を透視するのか。」必ずや社会全体が「同意」する「鏡と灯」が必要である。この「灯」の中にはユートピアの情景ばかりでなく、現実に機能する代替的な制度があり、民衆を教育し世界を認識するばかりでなく、切実に世界の改造に向けて人々を鼓舞してきた。富国強兵、「新中国」の建設、世界秩序への連結——リアリズム文学は各々歴史的時期に於いて、その巨大な社会動員力と凝集力を発揮し、文学エリートと政治エリートは、厳肅な文学の価値を認め、これによって消遣の通俗文学を貶め排斥してきた。

リアリズム文学は、イデオロギー的な整合機能の実現と同時に、個別の読者に対して限らない精神的慰撫を与えて来た。それは孤独な個体に対して、物語世界の中の位置や帰属を獲得させ、特にいつの時代にも一般の読者に歓迎された「成長小説」は、低層の青年達に奮起

上昇すれば、現実社会の中で合法的に（少なくとも情理に適う）やり方で出世できる事を認知させた。この種の機能は80年代にも尚有効に作用し、最も成功した作品は路遥の『平凡の世界』（1986）⁶⁾である。しかしリアリズムの道は路遥に於いて、頂点に達すると同時に転折点に至った。90年代以降、世界情勢と中国の社会構造に重大な変遷が生じ、それが啓蒙主義であれ、共産主義であれ、リアリズムを支持する価値系統は再構築を余儀無くされ、中国民間の価値観さえもが深刻な疑義に晒された。ここでリアリズムは「新写真」に転向し「熱していても冷めていても良く生きることが大事」「生きる為に生きる」福貴と、口先で幸福な生活を造り上げる張大民が「精神勝利」としての人々のモデルとなった。2005年に余華が『兄弟』を出版した時、「時代精神」を代表するのは、「成功した悪人」李光頭だった。道徳と良心を体現する宋鋼は、物質的にも精神的にも損失を被り、零落して物乞いに成り果てる。

この後リアリズムの創作は徹底して「トーテム」時代に入るが、それは和諧社会の主旋律とは相反するもので、商業文学とネット文学の領域が手を携え、社会を席卷した。『主流作家』は「純文学」が唱導した「個人化創作」から退出して、所謂「時代巨編」とされる大作も本質的には、「小時代」の「小叙事」となった。この価値が曖昧で、趣味が中庸の「小叙事」こそが、当代「主流文学」の創作の主流となった。加えて「専業作家」体制は少数の著名作家を雲の上に頂くものだったが、「主流文学」は依然として「リアリズム」を主導の原則とするものの、その影響力は、日増しに現実を反映する機能を喪失していった。

更に現実主義的な苦境を深層から反映する「低層叙述」も困難に遭遇した。2004年頃崛起した「低層文学」は、当代文学が80年代中期に象牙の塔に入ってから、初めて、大規模な社会重大現実問題へと転向した。「リアリズムの復興」に期待が寄せられたが、それは勃発すると同時に苦境に陥った。根本的な原因はと言うと、これらの現実の苦難を暴露した作品の背後には、現実を批判するための組織立った価値の系統が無かったのである。作家達は単に素朴な人道主義の立場から「低層」の苦難に同情したが、その悲嘆の嘆きは呐喊とはならず、その理由は「階級」が「階層」に取って代わった時代には、既にその抗争の合法性を論証する術が無かったからである。価値系統の欠如は、作品の思想性に限界を齎すのみならず、作品の美学的効果や、快感の機制をも損なう。——作家達がもはや思想的な基底が無く、英雄的色彩を具えた主人公を塑造する方法も無く、リアリズム作品の中で人々が最も期待を寄せた高潮のプロットは、士気喪失を加速させる事になったのである⁷⁾。此処に於いて、苦難の現実を描写することによって、悲劇感の形成も、人心の鼓舞も、人心の慰撫も不可能になったのである。

まさにリアリズムの創作が死地に追いやられた時に、意外なことに、もう一方でネット文学が湧き起って来た。大衆文化の基本的機能は、主流文化の欠落を埋め合わせることにあ

る。これらの欠乏は、一部は主流価値観によって抑圧排斥されたものであり、一部は主流文化が弱体化した後欠如したものである。これまで私達がネット文学について注目したのは、主に前者であった。——確かに、これらの「新文学」によって抑圧された「旧文類」が、再び文学市場の商品棚に並び、厳粛な文学によって蔑まれて来た消遣娯楽の機能が基本的な商業道徳と成ったのである⁸⁾。しかし本当の意味で今日のネット文学発展の核心的推進力となっているのは、あるいは新しい変化を懐胎しているのは、後者である、——とりわけネット文学の中に新しく誕生したのは「王道主流」を旨とする旧文類である。玄幻、穿越、耽美等それらは一定程度、正に今日の社会が喪失した主流の価値観を満たしている。例えば西方玄幻小说の興起は、啓蒙的理性が、神を抹殺した後、人々の生活の意味が失われたのと同様、中国の玄幻小说も、共産主義の偉大な叙事が解体した後、個人の世界が帰属する究極の意義が失われたのである。耽美小説は⁹⁾、伝統的言情モードが現代社会に於いて阻害されて以降、純愛に対する欠落を継続して満たして来た。漢唐宋明に回帰する「歴史穿越」小説は、「大国としての崛起」を夢想し、普遍的に「脱政治化」する時代にあつて、各種制度変革の可能性と政治参与の欠如に対する公民の公開討論を代替してきた。それは正統性を獲得した白話文のみに拘束され、学校、家庭、補講のルールの中で、育った少年達の青春の血潮の欠如をも満たしてきた。これらの欠落感は、“80後”“90後”のネット第一世代が特に共有するものである。彼らに相比べれば、先輩達は、多かれ少なかれ自らの現実生活体制に満足を見出し、彼らは全ての堅固な諸々が雲散霧消した後でも、前世紀に培われた信仰や激情を失わず、今日の紅色「諜報映画」を「主旋律」とするドラマを精神的資源としているが、その様な生活経歴や文芸的記憶を持たない“ネット世代”は自己創造に向かっているのである。

私は、決してネット文学を美化しようと思つてはいない。しかしもしネット文学を理解しようとするなら、一つの誤認を絶対に取り除く必要があると考えている。それは、所謂欲望とは、低級な欲望であり、所謂欠乏とは、無意味な欠乏であるという誤解である。ネット文学中には、自ずと読者の要求を満たす低級庸俗、畸形変異の欲望も少なく無いが、それが全てでは無い。事実、ある種の類型が発展成熟した結果、より古参の信奉者が支持する作品は、比較的高い精神的、文学的品質を具える傾向が見られる。ある意味で欲望と欠乏とは正当であるばかりでなく、高尚ですらあり、それは競争社会の現実法則が包容できない欲望であり、小康社会の平庸な生活では満たされぬ欠乏なのである。例えば、ネット文学の中で特に流行しているのは「愛着」であり、作者の創作に対する、作中人物に対する愛、作品人物の間の愛、ファン達の作中人物に対する愛、作者の間の愛などである。因つてネット文学が生み出し、依拠する所の「ファン経済」は研究者達によって「愛着の経済学」¹⁰⁾と称される。この様な概念は、当代文学の創作中には絶えて久しく存在しなかつたのではないだろうか？ リアリズムの創作が苦境に陥つて以後、多くの創作作家が、モダン派を模倣してか

ら、真善美の価値体系は、文学の中で分離を余儀無くされた。私達「ネット第一世代」が現実功利的すぎると、理想の激情も、崇高な美感も欠如していると咎められる時、誰が一体この様な精神的荒廃の世界に、彼らを置き去りにしたのか、反思する必要は無いのだろうか¹¹⁾。

互いを平等に尊重するという前提があつてこそ、私達は積極的な角度からネット文学の二つの重要な概念“爽”と“YY”を理解できる¹²⁾。“爽”は、ネット文学発展の基本的な推進力であり、“YY”は基本的な手法であるが、一貫してエリート体系から、一種の現実逃避であり、自我麻醉に耽溺しているとされ、厳しい批判を受けている。ここには確かに二つの文学観の根本的な対立が突出している。本質的に言って、通俗文学は“快感”を追求するものであり、厳粛文学は“痛感”を追求するものである。双方とも「痛みも快感も無い」という道理は承知だが、目的と手段の定位は異なっている。(ネット小説の“爽”には“虐”が含まれる。) 厳粛文学は痛感を掘り起こすことが目的であり、痛みが治療を引き起こす事に注目し、世界改造の達成が根本的な目的である。そして恰もこの「世界の改造」と言う前提がネット小説の作者と読者に認識されていないと見ている。それ故彼らは「厳粛—通俗」の序列の中で、自分達の二次的な地位やエリートの批判的指導は有り得ないと考えている。彼らの見方では、「鉄の部屋」が打破できない以上、また打破しても行く路が無い以上、この白日夢は、決して瓊瑤の類の伝統的通俗小説が天性備えていた「弱智」的色彩をイメージするものでは無く、覚醒者による自我麻醉と言い得るものである。高級なレベルでの白日夢はユートピア的な色彩を帯び、またリアリズム文学中の「灯台」のユートピアとも異なる。現実社会と併存し、相互に影響する「ユートピア」である。——ここに於いてリアリズムは新しい変種を生んだ。私は暫時それを「ヘテロトピア」の中の「新現実主義」と呼んでおく。

「ヘテロトピア」の中の「新現実主義」

王徳威は最近、劉欣慈の科幻小説『三体』を晚清小説以来の文学史の中で解読する時、フーコーが20世紀60年代に唱えた「ヘテロトピア」の概念を借り、科幻小説の当代社会におけるイデオロギー的機能を分析し、その理論と方法は、類型小説を主体とするネット文学研究者に直接的な啓発と参照性を齎した¹³⁾。

王徳威の解釈によれば、「ヘテロトピア」とは、私達の現実社会の様々な機制の企ての中、あるいは現実社会に生きる人々の思想と想像の心底に接触し、形成される想像的な社会を指す。それがユートピアと区別されるのは、それは理想的、将来的、虚構的な社会では無く、社会実践的、現場即時的、相互交流的な可能性を持つ事である。「ユートピアが指すのは執政者、社会投資者、権力当局が計画した一種の空間である。この空間の中には普通の人々が

目にしたくない整序や、治療や訓練が必要な因素、分子は特定の空間に置かれる。このような空間が存在する事が、私達の社会の所謂「恒常性」の存在を投射するのである。ヘテロトピアには、監獄、病院、学校、軍隊、そして博物館、ショッピングプラザ、テーマパーク等が含まれる。王徳威が「ヘテロトピア」の概念を借りて強調するのは、「科幻文学は一種の文類としてユートピアを体現する想像の空間である。更にこのような文類が私達の文学領域の中に存在する事は、その存在そのものが一種のヘテロトピアの開始となっている。それは絶えず間なく私達を刺激し、困惑させる。何が幻想で、何が現実なのか、何が経典あるいは正典文学の範疇で、何が二次的或いは正典以外の文学なのか。絶えず新しい思考方式に誘うのである。

「ヘテロトピア」の概念は間違いなくネット文学研究に新しい理論的突破口を開いた。事実上、ネット小説の各種類型の中で、とりわけこれらのシュールリアリズムの、幻想類型は、科学幻想小説と同様に一つの「ヘテロトピア」である。もしリアリズムの創作が苦境に陥った原因が、現実のロジックがユートピア想像に通じる道が阻まれたことにあるなら、これらシュールリアリズムの幻想小説は、「第二世界」¹⁴⁾を打ち立てることによって、阻まれた願望を実現する事ができよう。リアリズム小説の作者に対して、幻想類小説の作者は、自分の創出した「第二世界」の中で自分が立法者に成れると言う、大きな特権を有していると言える。しかしこの立法者は、神の様な絶対的な権力では無く、特に「高度幻想的な幻想文学」(ハイパーファンタジー)¹⁵⁾の中に、「第二世界」の内部に必ず厳密なロジック体系を創り、その論理法則は必ず現実世界の論理法則と読者の願望を参照するが、そうでなければ真実感と満足感を生む事が出来ないからである。ネット小説は常に詭計を弄すると、非難されて来たが、現実を離れ、更に架空、穿越、玄幻な「第二世界」になるほど、さらに強大な「現実相関性」を必要とし、読者の精神的な帰着点となっていった。一つの現実上に存在し相互影響するヘテロトピアを造り上げることによって、正しくネット小説は現実の方式に介入していったのである。それ故、ネット小説の研究で最も重要なのは、彼らの虚構がどのような世界なのか分析する事では無く、その虚構の世界が彼らの現実に対するどのような認識を投射し、彼らがその様な認識を如何に叙述しているかを分析する事である。

このような経路を経て、私達は更に開放性を具えた文学史視野の中にネット文学を納め、更にはネット文学のレベルを定位するために、胸中にエリートの眼差しを懐く事となる。一部の類型小説が普通の大衆通俗作品であるのかエリートの主導性を具えた経典作品であるのかどう見分けるのであろうか。ネット言語で言うなら「大神之作」と「大師之作」とをどう分けるのであろうか。肝要なのは、作者が創建した「第二世界」の中でどう立法するかである。實のところ一般の作者は現実のロジックを複製するか、媒介変数を修改することしか出来ない。例えば「狼が羊を食う」社会の中で、一人一人の平時の羊である読者は、「超能力」

を賦与された主人公が、ずっと思うが儘に威勢を奮うことを願う。この様な“爽”は読者に暫時の満足を齎すだけでなく、却って「羊は狼に食われるだけ」というロジックを強化するだけである。現実のロジックを複製するだけの作者の技法は、せいぜい「大神級」である。そして「大師」は、「大神」の技巧の集成者であるばかりでなく真正の「立法者」——現実の論理を参照しながら、高度にシミュレートされた「第二世界」を創出した後、一連の文学的手段を通して、賛同への承服を勝ち取り、現実ロジックの転覆を完成させる。正義が叶えられ、人心が晴れやかになる。——これは既に金庸大師が到達した境地でもある。この様な境地に到達するには、文学の機能のみならず、精神的な心情が必要になる。ある意味から言えば、これらの「第二世界」を掌る大師作者と西方理論界の「六月事件」以後書齋に退去した「大師学者」の間に同行異曲の現象である。現実の秩序を転覆させることが不可能になった後に文学秩序を転覆させたのである。しかし、通俗文学界の「大師」は、「大衆の大師」であって、「大師」の誕生は天才の降誕では無く、読者の誕生である。言い換えれば、「大師時代」の到来は、「大師」に釣り合う読者群の形成を意味する。

中国ネット文学の発展は十年余り「大神段階」に留まっていた。非常に喜ばしいことにこの一二年、大師クラスのコレクションと思われる作品が出現し始めた。私の中で特に推薦するのは、猫膩の『間客』である。この作品は2010年起点中文网で男子学生の部門で選ばれた年度作品（2011年連載完了）としてネット文学史上メルクマールとしての意義を持つ作品である。小説は玄幻を背景として、ある小人物、許楽の成長物語を描いている。一連の奇遇や苦難を経て、主人公の人生は異彩を放つだけで無く、終始道徳的な純潔や、内面的な完全さを維持する。作者が2008年にブレイクした『慶余年』に比べると、『間客』は思想的境地から見て質的な飛躍を遂げている。主人公はもはや自分や親族の利益の為に、手段を選ばないという事は無く、人類の究極的な配慮の意義から、道徳的良心の要求に従う。主人公が身を置く背景には、極めて強力な現実との相関性と前衛性が窺われる。（この虚構の連邦は、中国人の想像するアメリカに似ており、且つ金融危機以後、寡頭政治が浮上するアメリカである。）これによって作者はより高い見地から個人の自由と国家の責任、連邦精神と家族の利益、神聖な目的と卑劣な手段、絶対的正義と部分的妥協などの矛盾問題などを討論する。小説の調子は宏大で明朗——各種の権力と不可視の権力、規則と潜在的規律との複雑な駆け引きを背景として、主人公の明朗楽観的性格、単純率直な行動方式（時に暴力を伴う）そして燦然と輝く人生の結末から、悠然と読者に「純真な人には前途がある。」と語りかける。この様に、「小人物」の不公平への怒りは弛緩し、人々の心中の道徳律は平安を得て「星空を仰ぐ」心境に落ち着く。この「老猫」と称される若い作家は、ネット文学の中では最も目立つ作家では無いが、アカデミックファン達から強く推戴されている。『慶余年』から『間客』に至る作品に於ける、境地の昇華は、作者個人の飛躍では無い¹⁶⁾。明らかに

2008年の北京オリンピック前の志気高らかな邁進から、地震と冰雪被害に到り、更に金融危機後の国民全体の心理的転向である。この大災難と大危機の後、再び生命の意義を考慮し、人類の基本的価値観についての信仰が少なくとも一部の人々の精神的趨勢となったのである。

目前のネット文学では、『問客』の様な作品は極めて稀少かつ得難く「孤本」とまで言われるが、アカデミズムの批評家達から特に注目し値する創作傾向とされている。その中に私達は試みに、「ヘテロトピア」の中の「新現実主義」の核心的要素を抽出して総括することが出来るかも知れない。最初に、それは客観的真実として現実を反映していない。しかし精密かつ深刻に現実のロジックを掌握して、読者の深層の欲望と価値観小説が創造した「第二世界」に照射している。第二に「高度に幻想的な幻想文学」として、「第二世界」自身が厳密な論理系統を必要とし、その系統は現実的な論理の基礎を参照し、超越性、誘導性を具えた「新しい立法」を再構築する。第三に現実のロジックと想像力のロジックは、相互に浸透し、読者の“爽”の目的を満たし、“YY”を許容する¹⁷⁾。

「第二世界」とその中の新しい「立法」を構築することで、「ヘテロトピア」の中の「新現実主義」は、伝統的リアリズムの価値観の苦境を突破する。許楽は孫少平と同じく低層出身の好青年であるが、池大为がどうしても飛び越せなかった「陥穽」を、彼は容易く飛び越え行くのである。その理由は、作者が彼に強い道徳系統を賦与すると同時に、更に強力な超越的、神秘的な能力系統を賦与している為である。ここで私達は現実主義小説の中で抑止されている美感快感が疎通を得て、心ゆくまで溢れ出る叙述の中に「話題の人」が再び神棚に上るのである。イデオロギー的整合機能が代替的に修復され——当然「ヘテロトピア」の意味に於いて——誰も許楽同志を模範とする人はいない。小説の中で許楽が「耐えられなかった」全ての事を、私達は現実生活中で耐えなければならないから。小説が提示する異なる価値系統は、その中に敬慕、愛、暖かさを含むが、それは依然として一服の麻醉剤である。高級な“爽”は人々を更に「忍耐」させる。そこでこの様な「ヘテロトピア」は、現実、社会との併存を許されるのみならず、必要ともされるが、その理由は、反抗的であると同時に、安全である為だ。

「ヘテロトピア」の「新現実主義」がネット文学に出現してから、それは私達の文学秩序を攪乱させた。私達は再び何が正統であり、何が非正統であるか再考せざるを得なくなった。何が厳粛かつ高雅な文学であり、何が消遣の俗文学なのか、両者の定義をどう画定するのか。これらの問題の検討はネット文学の領域に留まるものでは無く、当代文学全体が回避出来ない問題である。

ネット批評独自の言説の創建 「文化研究」から「文学研究」へ

ネット文学の基礎の上に、エリートの基準を反思する事により、私達は漸く真正にネット文学研究の領域に入ることが出来る。現在ネット文学研究には幾つかの問題傾向が存在している。一つは盲目的な西欧化であり、西方の「ハイパーテキスト」理論を踏襲したことにより抽象化と観念化に偏り、中国の実際の情況に接合出来ない。もう一つはエリート本位であり、本質的に“文学性”をネット文学に要求し、結果として必然的に芸術性の欠如や精神的深度を指摘される。文化研究の立場から見ても、とりわけ理論資源の援用、立場から類似の問題傾向が存在する。一つはポストモダン理論の単純な適用である。一つはフランクフルト学者の大衆文化批判の立場が習慣的に継承されている事である。もう一つは単純に文学の娯楽性と現実逃避の特性を肯定している事で、或る意味で大衆文化批判を転倒させている。提起された問題と方式はその解答に影響する。このような研究は基本的にネット文学の外に存在するもので、その潜在能力を発掘する事は不可能である。

目前の研究に於ける困難を突破する為に、新しい理論と実践を結合させた経路を探索してみたい。この問題は2011年6月に北京大学中文系の韓国人留学生、崔宰溶博士の論文『网络文学研究的困境与突破——网络文学的土著理论与网络性』¹⁸⁾の中で提出された非常に啓発性を具えた観点を焦点とする。特に深く説き明かした「介入分析」の方法は目下研究に強い実行性を有している。

「介入分析」の概念はアメリカの学者ヘンリー・ジェンキンスが提唱し、それは概念と言うよりは、一種の研究態度と文化実践である。即ち更に積極的に文化研究の対象に参与する態度である。研究者は「アカデミックファン」の立場を自任し、研究論文の中に大量の一次資料（ファン達の文章）を引用し、関係するディスカッションに自ら参加する。「アカデミックファン」の任務は、実際にアカデミズムの学術理論とエリートファンの「土着理論」の橋渡しであり、相互対話と疎通にある。学術理論はネット文学の享受者達に更に的確で鋭利な言語を提供するかも知れない。逆にネット文学の享受者達は、学術研究者に対してより実地に即した洞察力と私達に足りない「インサイダーの知識」を供与出来よう。双方の対話の立場は平等であり、どちらからの提議も重要であり、この問題については、筆者は特に崔宰溶の立場に賛同し、エリートファンの「土着理論」から始めたい。その理由は、現在の学術理論は、決してネット文学の実際の情況に符合する事を前提とせず、理論から出発して研究が閉塞した循環に陥っている。——研究者達は自分が見たいものしか視野に入らない。それ故「土着理論」の概念を糸口とすれば、内部から現実を掌握できる。崔博士の計画した「好循環」とは、先ず理論研究者がネット文学の実践者であること。特にアカデミックファ

ンが、彼らが本能的に用いている「土着理論」を傾聴し、学習し、その後それらを厳密な学術言語と学術理論に加工（翻訳）し、最後にこれらの弁証的な学術理論をネット文学にフィードバックすることである。

この過程で、私達は専らネット文学に焦点を合わせた文学研究の批評言説系統を創建することが出来る。若し私達が組織立った伝統文学の学術用語と概念で直接ネット文学の研究に切り込めば、思い通りにそれを描けるだろうが、ネット読者に受容されることは無く、独り言に終わるのであろうし、ネット文学の生態には溶け込めない。崔宰溶博士は論文の中でこう言及している。アカデミズムの学者は一種の文化植民地的傾向を警戒すべきであり、リアルな比喻を挙げて、学者達は先ず外部者であり、植民者では無いと自己認識すべきである。難解な新しい言語は先ず習得して、翻訳すべきである。この様翻訳には多くの保留と創新が付き物だが、こうして独立したネット文学批評言語の系統が形成されるはずである。この様な批評言説は、その世界に於ける前衛的学者との対話を可能にし、ネット文学内部での読者とファン達の対話を可能にする。

今日のネット文学研究は、多くが文化研究の方法を採用している。文化研究は固より特にネット文学研究に適応した方法だが、今日に至り、私は“文学研究”の領域に入り、その陣地に討ち入る時期だと考える¹⁹⁾。中国ネット文学の実際の創作状況から出発すると、伝統文学領域は過去の研究方法であるように思われ、未だ適用されていない。例えば「大神」によって支えられる各種大手ウェブサイトは、ロラン・バルトの言う「作者の死」を議論しても大した意味は無く、同様にネット文学が如何に断片化、零散化していたとしても、それは各種の完全な構造を具えた「宏大な叙事」に満ちているからである。もし「主題分析」「人物分析」などの伝統的に常套な諸々の技芸を用いて、それに文化研究の視野を加味してこの学術的荒地を開拓するなら、必ず大きな戦果を得るであろう。実際正に草の根の“アカデミックファン達”は、自発的にその研究手法を自覚している。文学史の座標系や文学理論の資源を携えた学術研究者の参与は、対比の中で何が変わり、何が変わらず、何が意味のある新しい変化なのかを考察し得るであろう。

事実上、一旦ネット文学研究に入れば従来の方法を墨守する事は出来ず、研究対象に基いた変化、あるいは自然に（或いは自ら自覚的に要求して）研究方法を調整しなければならない。例えばネット文学の重要な特徴「ネット性」についての認識である。紙媒体の「創作—発表—閲読—評論」という方式と異なり、ネット文学の「生産—享受」は殆ど同時に発動する集体的活動である。——全ての人気を博するネット小説は、その連載中一二年の期間に、必ず大量の熱心なファン達に付き纏われる。ファン達は作者を養育する父母であり、誠意を持って諫める友人兄弟ともなる。彼らは勝手気儘に作者の品定めをし、作家の智力や力量を審査し、時期に合った啓発や刺激を求める。ネット作家は長期に渡って生き残るためには

「超人」的速度での更新を迫られ、圧力に晒されるばかりでなく、多くの場合激情的な創作状況に置かれる。金庸の時代の報刊連載と比べると、ネット上の興隆空間は、正に古代の講釈場である。多くのアカデミックファンを虜にして、引き寄せた小説は、集体的な智慧の結晶とも言え、作者は総執筆者の如しである。中国の多くの古典名著の誕生方式を想起するなら、これもまた偉大な小説誕生の特色ある経路と言えよう。この様な作品研究には多くの加筆を伴う「同人」²⁰⁾創作も加える必要があり、この様な意味で「作者の死」を討論するのであれば、中国の特色として理論的意義を有するであろう。

以上の研究態度と方法は、具体的な研究実践の中で探索されてこそ有効である。更に長期的な角度から見れば、この種の批評言説系統の建立は、ネット文学研究者にとって有効なだけでなく、中国学術界に於ける新規の批評理論創設を促進するであろう。百年來、中国文学は創作から批評まで、常に西欧と歩調を合わせて来た。ネット文学の興盛は、目下のところ独り中国のみに存在する現象である。私達は理論上の自力更生に迫られ、また「中国女性エクリチュール」理論界が世界文学理論の建設に貢献すべき時であると覚醒を促したい。

最後に、文章の最初に筆者が掲げた大胆な予言に立ち返りたい。目前の態勢と発展が続けば、十年後には中国当代文学の主流はネット文学になる可能性が高い。メディア崇拜からでは無く、生命を得た文学機制と新しい文学様式が認められるからである。ネット時代にはエリートが除去され消滅するとは考えられない。反対に資本が横行し、大衆が狂奔する時代であればこそ、エリートの標準を建立する必要性が生じ、それは学院派の任務である。あるいはネット時代には、当代文学研究従事者は新しい要求を提示すべきだと言えるかも知れない。私個人の文学理念では好ましい文学生態は、ピラミッドの頂点と底辺とが互いに認識し連動する事である。もし大衆文学を主体とするネット文学が、すでに“純文学”や“主流文学”の指導的地位を放棄したなら、エリートの先端がそこから生長する事は有り得ない。それだからこそ学術界がファン達の“弁別力”や“識別”に介入して影響を及ぼし、自ら優秀と思う作品や優秀な因素を指摘して、アクセス数や定期制、ランキングの他に、エリート主導の評価基準の体系を構築する必要がある。若しこの様な体系の標準が真正に影響力を持つ事が出来れば、「新文学」を創建した五四の先賢とは異なる、私達が身を置くピラミッドの先端の未解決の問題を、再構築する事が出来る。そのため自分が率先して、その地盤に入り、その手立てと方法を探究したい。

註

- 1) 邵燕君 (1968～) 北京大学中文系教授。文学博士。主な研究は当代文学生産機制について。
- 2) 弁別力 (Discrimination) と識別 (Distinction) も又ジョン・フェンクスが提唱したファンの基

本的特徴の一つ。ファン社会は非常に敏感に作者を識別し、ある作家を推奨し、ある作家を排斥する。一つの体系の下にランク付けを行い、それがファンにとっては重要な意味を持つ。『粉都的文化経済』及び、陶東風主編『粉丝文化读本』北京大学出版社、2009年を参照。

- 3) 中国作家協会専属の文学ウェブサイト関連部門責任者で、長年ネット文学の足跡を追っている馬季先生の調査研究によれば、現在全国に一万以上の文学ウェブサイトとコミュニティがあり、様々な形式でネット創作に関わる人は一千万以上に及び、重複登録等の要素を排除しても、著作に専念し、契約している作家が凡そ百万、その中で1万から2万が経済的収益を得ており、三千から五千人が専従の作家である。専従の作家は、収入が安定しており、月収が1千から2千元、多いのは十万元以上、更には個別収入が二十万以上のネット作家もいる。全体的に見て、専業作家の分布は山型で、両端が少なく、中間が多く、月収3千から5千が最多である。」彼が特に強調しているのは「伝統的作家は多くが一級、二級都市に居住していたが、ネット作家の分布は広範で、小さな県城から山間地域まで及んでいる。」馬季『网络写作意义超越任何一次文学革命——访中国作协网若文学专家马季』『中国社会科学報』2011年1月25日
- 4) ファン経済は、ジョン・フェイクスがファン文化研究の礎を築いた論文『粉都文化経済』の中で提出された概念であり、生産力と参与性がファンの基本的特徴の一つであるとされている。ファンの生産力とは新しいテキスト生産に関わらず、原始テキストの構築過程にある。これ以後のファン文化研究者達は、「ファン経済」の最大の特徴は、生産と消費の一体化として認識している。ファンとは過渡的な消費者であると同時に、積極的な意味での生産者であり、一つの新語として「産消者」を生んだ。
- 5) 王徳威『被压抑の現代性』『想像中国的方法』三聯書店1998年
- 6) この小説の中で路遥は、孫少安、孫少平の様な郷村に生まれて高い志を懐く「当代英雄」を塑造するばかりで無く、一つの「黄金信仰」を提起している。勤勉な者が富を得て、善人には良い報いがある。この様な民間の価値に由来する信仰は、ちょうど小説が80年代半ばの農村請負制の「黄金時代」に執筆された為に、制度を基礎として、加えて路遥が誠実さへの使命と、丁寧で微に入る描写を用いて、高度に迫真した夢想世界を構築することに成功している。『平凡な世界』は、“新时期”以来民間で最も広範に長く伝わった作品であり、未だに再販され読み継がれ、時代が変わっても多くの人々に感動を与えている。
- 7) 曹征路の中編『那儿』（2004年）は恐らく唯一の例外であり、小説の美学が紛れも無く特殊な題材と視点の上に、明確な価値の掌握と批判的指向を打ち立てる事に成功している。そして長編『问苍茫』では直面した問題が更に複雑さを加えた為、同様に思想的な苦境から齎された内面の痛手が現れている。筆者の『从现实主义文学到「新左翼」文学』『南方文坛』2009年第2期。
- 8) 極めて代表的なのはネット作家南派三叔主編の雑誌「超好看」である。（2011年8月創刊）磨鉄図書有限公司出品、青海人民出版社出版。初版50万刷が翌日には品切れとなったベストセラーであり、及び郭敬明主編の販路が安定した『最小説』、韓寒主編『独唱团』、アニー・ベイベーの『大方』は何れも初版百万部を記録しており、反面から見れば、主流文学期刊から読者が流出した主要な原因はメディア革命では無く、機制の危機と言える。『南派三叔「超好看」出版 畅销作家当主編成趋势』『法制晚报』2011年8月9日を参照。
- 9) ‘耽美’の語は、最も早くは日本の近代文学に現れ、「自然主義」文学に相対する文学創作の風

格を呈現していた。日本語の発音は「TANBI」であり、本来の意味は「唯美、浪漫」の意味で、耽美とは美に耽溺して、全て読者に純粹の美を享受させる題材を提供するものであり、BLはその中の一部分である。中国ネット文学の中の耽美文学は深く日本の影響を受け、独自の風格を形成して来た。耽美文学の發展流変、快感機制と受容心理分析については、吳迪『一入耽美深似海——我的“耽美・同人”史』『网络文学评论』2011年10月創刊号、広州省作家協会主編、花城出版社。

- 10) この概念は私が北京大学で開催したネット文学シンポジウムで林品（中文系博士生）が提起した。主な論点は、Web2.0の時代になって、一方でネットユーザーは、転送や共有の機制により、機敏に彼らが「有愛」を感じるネット文学作品の伝達効果が拡大した。もう一方で“ファン”の友人達は、既成の文学作品や題材への「有愛」に甚大な心力を注いで、大量の「同人」「同類型」作品を創作し、ネット文学の相貌を豊富にし、ネット文学の生産量を極限まで増加させた。「有愛」はネット文学の極めて重要な伝達動機であり、ネット文学の最も重要な創作誘因でもある。ネットユーザー間の無償の、「共有」と「創作」は、また多くのネットウェブサイトのアクセス数を高め、経済収益を向上させる重要な源泉である。
- 11) これはある時学生との討論に於いて、一人の“80后”の女子学生が、授業後のメールで提起した問題であり、これを眼にして心を揺り動かされた。
- 12) “爽”と“YY”の含意はかなり複雑でコンテキストから理解するしかない。
- 13) 王徳威先生の2011年5月11日、北京大学での『乌托邦・恶托邦・异托邦——从鲁迅到刘慈欣』と題する講演。『文芸報』2011年、6月3日、6月22日、7月22日の三期に渡って連載されている。
- 14) 『第二世界』は最も早くは『魔戒』の作者トルーキンが提出したもので、神が創造した現実世界「第一世界」に対峙するものである。ここに於いて人は、神に代わり、神から賦与された想像力によって、もう一つの新しい世界を創造する事が出来る。
- 15) 幻想文学は「幻想レベルの低い幻想文学」と「幻想レベルの高い幻想文学」に分けられる。前者は比較的宏大で新奇な世界観を擁し、内在的な秩序に欠けた一種混乱した姿態を呈する。後者は高度に緻密な内在的一致性を持ち、人に真実であるかの様な感触を齎す。前者にも成功した作品はあるが、成熟し經典化した作品は基本的に後者である。
- 16) 『問客』以前に猫膩には『朱雀記』と『慶余年』がある。このうち『朱雀記』は2007年新浪原創文学賞玄幻類金賞を獲得している。
- 17) 庄庸は論文『中国网络文学十年的关键点』（『网络文学评论』2011年10月創刊号）の中で、ネット文学中の「新リアリズム」を分析し、「偽リアリズム」の概念及びそれと伝統的リアリズムの区別を詳細に定義している。庄庸博士は、長年に渡り、ネット文学を視察、研究し人々を深い省察に導くネット文学界にとって稀有な「草の根学者」である。私自身の研究における転換点であるばかりでなく、北京大学ネット文学課程の建設にとっても、庄庸博士は惜しめない支持と序力によって重要な役割を担った。感謝の意を表したい。『問客』の解説及びその含意する新リアリズム要素の特徴について、私たちは深く掘り下げて討論し、お互いに啓発された。具体的な見解は異なり、公開発表の時期も大差なく、互いに引用しない取り決めとなった。
- 18) 韓国の学者、崔宰溶博士によるこの論文は、時機を得て中国ネット文学研究に主導的な意義を有しており、中国研究者として感謝したい。同時に崔博士が論文中に於いて、筆者の論文『传

『统生产机制的危机和新型机制的生成』(『文艺争鸣』2009年第12期)の中で公表した様に法兰克福学派のエリート主義的立場の、慣習的継承に批判を加えている点から、私自身の研究姿勢の転換を促した事についても謝意を表したい。

- 19) 当然、これは直ちに一連の関連する概念と絡み合う。例えば「作者の死」の概念が、伝統的作家研究を標的として久しいが、如何にして「网络写手」という意味での作者を研究すべきだろうか。「ハイパーテキスト」のネット時代に於いて如何にして「作品」を定義すべきか。作品(work) テキスト(text) ハイパーテキスト(hyper-text) の関係は何だろうか。これらの問題は実際に学者達が理論上の精緻化を進めており、私は研究者が伝統的作家、作品研究に潜入して、様々な試みを実施すべきだと主張したい。
- 20) 「同人」創作は、ファン達が原文に依拠して、自発的創作を進めることを指し、少なくとも創作時に於いて、それは非商業的である。